

# シモーヌ・ヴェイユと来るべき倫理

— パリ第七大学マルティーン・レボヴィツシ氏を招いて —

2009年7月14日(火曜日) 参加自由、通訳あり

明治大学駿河台校舎アカデミーコモン二階会議室

- JR中央線・総武線、東京メトロ丸ノ内線 御茶ノ水駅 徒歩3分
- 東京メトロ千代田線 新御茶ノ水駅 徒歩5分



## 第一部(14:00 -- 16:30)

渡名喜庸哲: 「エマニュエル・レヴィナス 反シモーヌ・ヴェイユ? —— レヴィナスにおけるヴェイユの影響」

鈴木順子: 「シモーヌ・ヴェイユの「聖餐」理解 —— 現代キリスト教会への問題提起的意義」

岩野卓司: 「不可能なものとしての善 —— パタイユのヴェイユ論をめぐって」

合田正人: 「「第三種認識」とは何か —— スピノザ・アラン・ヴェイユ」

## 第二部(17:00 -- 19:00)

マルティーン・レボヴィツシ: 「シモーヌ・ヴェイユが洗礼の拒否を正当化するために用いる諸論点について」(仏語 通訳: 根本美作子(明治大学))

(Martine Leibovici, « De quelques arguments employés par Simone Weil pour justifier son refus du baptême »)

全体討議



マルティーン・レボヴィツシ(Martine Leibovici) 1948年生まれ。パリ第7大学にて政治哲学を教える。主な研究領域は、ハンナ・アーレントの政治哲学、近代におけるナチズム・全体主義の影響、抑圧の政治に関する分析、自伝の哲学的考察など多岐にわたる。アレント研究・政治哲学研究の他にも、スピノザ、メンデルスゾーン、ザーロモン・マイモン、レヴィナス、ヴェイユ等、近現代のユダヤ系哲学者に対する考察を精力的に行っている。主著に『ハンナ・アーレント、ユダヤ女』

(合田正人訳、法政大学出版局、2008年)等。ヴェイユ関係では、論文に「S・ヴェイユとユダヤ人: 見ないことの強制」(*Cahiers Simone Weil*, 30/3, 2007)、「S・ヴェイユ、生まれ損ねた女」(in E. Benbassa et J.-Ch. Attias (dir.), *La haine de soi*, Complexe, 2000)等がある。この度、明治大学国際交流センターアポイントメントプログラムにより初来日。

連絡先: 明治大学文学部 合田正人 mg1957@kisc.meiji.ac.jp